

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第9号 #
南九州城郭談話会報 #
平成10(1998)年12月20日発行 #
#####

都城市森田御陣について (前編)

米澤英昭

1 はじめに ～庄内の乱～

森田御陣は慶長4～5年に起こった庄内の乱時に構築されたもので、現在もそのほとんどが無傷で残っている。この乱は島津家中において最大の内乱であり、その経過は、『旧記雑録』（『鹿児島県史料』、以後『旧記』と記す）・『都城島津家史料』や、『庄内軍記』・『本藩人物誌』・『西藩野史』といったものに数多く記載されている。

庄内の乱は島津と伊集院の戦いで、慶長4年3月9日に京都において都城領主伊集院忠棟（幸侃。以後幸侃と記す。）が島津忠恒（後の家久）に斬殺されたことに始まった。幸侃は島津家家臣でありながら、都城を中心とした8万石という島津義久・義弘らとほぼ同等の自領を有し、島津家と豊臣政権との取次役的部分を担う、いわゆる島津家内部における「親豊臣派」の中心人物である。この事件の報を都城で受けた子の忠真は、「庄内十二外城」といわれる12城を拠として抗戦に出た。島津方はこれに対して、義久・忠恒が主となり、島津領内はもとより、隣接している飫肥伊東、福島（櫛間）秋月への交通封鎖の依頼（『旧記』後編3-687・745）、庄内周辺への諸将の配置（『旧記』後編3-686・687）を行い、忠恒は東霧島神社（北諸県郡高崎町）に陣取って、野々美谷城・志和池城への攻撃を行う。この志和池城攻めの際に森田御陣は構築された。

この戦乱はいっこうに収まらず、ついには慶長3年の豊臣秀吉没後さらにその勢力を強めた徳川家康、又はその家臣山口直友の介入や秋月・太田ら九州諸大名の加勢を受ける（『旧記』後編3-786・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻）こととなる。そして、慶長5年2月5日に志和池城が陥落し、これを契機として急激に勢力を弱めた忠真は29日遂に和睦を受け入れ、ここに乱が終結した。この後、忠真は頼娃1万石へ所替となり同地へ移される（実際は阿多〔鹿児島県川辺町付近〕を領した）が、家久（忠恒）とともに上洛途上にあった慶長7年8月17日、日向野尻（西諸県郡野尻町）にて射殺される（『旧記』後編3-1683・1688）こととなる。

2 史料・発掘成果等に見る『御陣』

森田御陣は、宮崎県都城市上水流町字森田原一帯に所在する陣城である。慶長4年（1599）の庄内の乱において、伊集院方であった志和池を攻略するため、島津方が築いたものである。志和池城は大淀川北側の台地端部に立地しているが、御陣はそれをまさに取り囲むように築かれており、「森田御陣の事付斥候の事」（『庄内軍記』都城市立図書館 1975）によると、その様子は「堀を不り廻らし、築地を構え、四面の堀に差間をあけ、さしも堅固に構へたるは幾年月を送るとも意易くぞと覚へける」ほどであったといわれる。

① 絵図・資料からみた『御陣』

御陣の現況はわずかに破壊を受けているものの、ほぼ原形をとどめており、その縄張は都城島津家所蔵の古絵図とほぼ一致する。本陣（絵図では「御陣」）は島津忠恒が陣したところであり、台地が東西方向から北に方向を変えた隅に位置する。千田嘉博『都城市の中世城館』によると、この北側にある堀が「何度も鍵の手に折り曲げ、死角のない罫線をつくりだす」というものであり、「他の陣に比べ格段に格式が高く、防御を嚴重にし」ている。そしてこの本陣から東側に出るためにの出入り口には、防御・出撃性に優れた馬出しが築かれた。このような馬出しタイプの出入り口についても「織豊政権の拠点城郭の影響を受けたもので、当地方における従来の技法にはなかったもの」との見解が示されている。

本陣の隣（北側）には「長寿院陣」がある。これは島津家家老であった長寿院盛淳が陣したところである。盛淳は熊野の修行僧であったらしいが、義久の命により、家老となり、文禄の検地においては幸侃とともにリーダー的位置にあった人物である。そして本陣の後ろ（西側）には「入来院又六陣」（入来院重時）があった。又六重時は垂水家祖忠将の嫡子以久の二男にあたり、入来院家の養子となった人物で、義弘との関係が深く、関ヶ原の戦に従軍、戦死している。この陣の中心部分には、これもまた関ヶ原に参戦した豊久が陣する「嶋津中務殿陣」が、志和池城西

拵近くには、北郷忠能・北郷三久が率いる「北郷陣」があった。豊久は島津貴久の四男中書家久の子で、この時は既に佐土原を領している。忠能は忠虎の子で、時久の孫にあたる。三久は北郷時久の二男で、朝鮮の役で病死した兄忠虎の子忠能を補佐しこの乱で戦っている。後にこの三久家は平佐（鹿児島県川内市）にて分家し、以後島津本宗家の家老格として存続していく。志和池城西拵はこの時既に島津方にあり、ここには11～12間×6間という棲楼台があった。志和池城の北東側には、重時の父である垂水家島津以久が陣する「嶋津右馬頭殿陣」や、家康の指示により加勢に駆け付けた高橋（日向高鍋）・秋月（日向延岡）・太田（豊後臼杵）ら諸大名が陣したといわれる「京陣」「豊後陣」があった。また、志和池城・御陣の南を北流する大淀川には「綱引所」があった。これは伊集院方である野々美谷（南西）方面からの援助物資を遮るためのものではないかといわれている。

（以下、次号へ）



◆◆ 第9回見学会・例会報告 ◆◆

出 口 浩

今回は阿蘇溶岩の浸食によって出来た深淵「高千穂峡」と太古の舞「夜神楽」で名高い神話の里・宮崎県西臼杵郡高千穂町で6月28日に開催された。談話会の開催地としては現在最北のフィールドである。当地は日向・肥後・豊後の国境として要害の地を占めており「高千穂48塁」と呼ばれるほど山城が多く注目を集めている地域である。九州各地を回る談話会ならではの格好の企画であった。

会場の高千穂町コミュニティーセンターに9時30分に集合し開会式を行い、午前中は高千穂町教育委員会の緒方俊輔氏の案内で亀山城と亀頭山城の見学を行った。午後は会議室にて例会が行われた。参加者50名、午後3時閉会となった。

◆見学会

凸亀山城（大野原城）天正19年落城

三田井から岩戸に通じる街道を睨む要地に位置している。北～東～南側の3方を岩戸川の断崖が巡る自然地形を最大限に生かした単郭の要害。弱点の西側に3本の堀と2つの土塁を設けている。中心部は4段の曲輪をなし「櫓台」らしき高台と「枳形虎口」が確認できる。高橋元種軍の鉄砲隊に背面の東側から攻撃され落城したという。広城農道建設の予定地であったが、関係者の努力によって保存された。発掘調査は行われていないが、遺構遺物の残存が予想され、大きな成果が期待されている。

凸亀頭山城 文禄3年高橋元種が攻撃

高千穂町の北西の玄関口ともいえる要地に位置している。奥鶴から東南方向へ延びる痩せ尾根を3本の堀で区切り、先端部の尾根を土塁として南側に三日月形の曲輪（本丸）、その北東側にやはり三日月形の曲輪（二之丸）を配する。南縁から東縁にかけて櫓台

（見張り所）とみられる3カ所の突出部がある。自然地形を利用した山城であるが、三日月形の曲輪等については発掘調査による確認が必要であろう。本丸の一隅に道標をこの地域一帯に残したことで知られる石工「甲斐有雄」の作品が地元の篤志家富高則夫氏によって蒐集され野外展示がなされていた。

山城とは直接関係はないが筆者が特に印象深かったのは「贈外燈八基 森アヤ 平成2年3月」の石碑である。森氏の住所が「鹿児島県日置郡市来町港町2863」とあり、筆者と全く同じ同郷・同区だったからである。遥か遠い薩南の地から森氏がなぜここに？今度帰ったら森氏を訪ねてみようと思うことであった。

◆例会

下記の発表があり、熱心な質疑がなされた。

・吉元正典氏「延岡城跡について」、・緒方俊輔氏「高千穂町の中世城郭について」「中世城郭研究の民俗学的アプローチのすすめ」

最後に三木会長が地域共同体を代表するものとしての城の役割と本城や支城または古城や新城などの分別の重要性について統括された。



亀頭山城にて 平成10年6月28日（提供出口）

佐土原城出土の瓦をめぐって(3)

若山浩章

佐土原城出土の瓦について、前回は金箔瓦をもつ遺構がいつ誕生したかということについて言及した。今回は最後の問題として、この遺構が破却された経緯について検討したい。

『旧事集書』によれば、「(島津)以久公御晩年ニ及ビテ此鶴松城を山下平地ニ御移りなされ度由ニテ、直ニ宇津精之助ニ被仰付、寛永二年(1625)冬の頃只今の山下ニ御引移し築直し候より松鶴城と云、」(文章中の括弧は筆者注、以下同じ)としている。同遺構の築城を前回は慶長16年(1611)としたが、この記載が事実とするとこの遺構はわずか14年で破却されたことになる。では、何故これほど短命に終わったのだろうか。

『日向地誌』には「此城伊東氏累世ノ居城、殊ニ義祐ノ豪奢ニテ其壯麗ヲ極メ年年修繕ノ費小藩微力ノ能ク弁スベキニ非ザレバ、以久ノ孫飛騨守忠高ノ時ニ至リ寛永十四年丁丑十一月山上ノ城堡ヲ廃毀シテ山下ニ移住セシヨリ昔年ノ景況ハ大ニ殺ケタリ」とある。山下に移った年次が『旧事集書』と相違しており注意を要するが、移転の理由について、城郭の老朽化が目立ち修繕費が藩の財政を圧迫するようになったからだとしている。確かに佐土原城には伊東氏以来の遺構が残っていたと考えられ傾聴に値する。しかし城の老朽化は慶長の頃にもすでにわかっていたと思われ、天守台をわざわざ増築することもなかったであろう。少なくとも忠興は慶長16年当時、将来移転することは考えていなかったと思われる。

一方、『佐土原藩譜 卷之五』は「(以久)公移テ上城ニ居ルコト八年、晩年城内ニ埋物アルヲ聞キ城ヲ山下ニ移サンコトヲ諭ス、果サス、二代忠興公其志ヲ続キ言ヲ群臣ニ謀ル、庶々佐々宇津狩野介祐朗ヲ挙ク、則チ命シテ縄張ヲ為シム、是レ寛永二年冬十月ナリ、」と説明している。これによれば不吉な埋物が

移転の理由ということになり、それを厭った以久の意志を継いだ忠興が実行にうつしたということになる。しかし、前述したように以久の意志を継いだのであれば慶長の天守台築城はなかったはずである。

では、本当の理由は何であろうか。これについては、破却の年次を疑ってみることも必要であろうし、あるいは天守台自体が破却に躊躇するようなものであったかということも検討する必要がある。しかし筆者はこれ以外に、この問題に関して検討すべき点が2点あると考える。

一つは江戸幕府との関連である。周知のように元和元年(1615)の武家諸法度の発布により大名の城郭には規制(新規築城の禁止と居城修補の届け出)が加えられることになった。これは忠興に決断をうながす一因になったのではないだろうか。老朽化した建物だったとしたら修補も度重なる。そのたびごとに修補の申請をすれば、いらぬ疑いを幕府に抱かせることになる。そうした考えが働いたのではないだろうか。

今一つは城下町との関連である。山下に移した位置を見ると佐土原の町に接近していることがわかる。当時の佐土原の町がどのような規模であったかは未詳というしかないが、嶺南は伊東義祐の頃には相当発展していたと考えていた(前回拙稿参照)。忠興は城と町の一体化を図り、近世の城下町としての再編をめざしたとも考えられる。いずれにせよこれらの議論は憶測であり、新築許可の幕府連署奉書の確認や町の発展経過など検討する必要がある、今後の課題としておきたい。

さて、最後に新しい城の建築の経緯をみておこう。『佐土原藩譜 卷之五』によれば、新城の縄張は佐々宇津狩野介祐朗が行った。同書は祐朗について次のように説明する。

「(寛永二年)己丑冬十月、公城ヲ山下ニ移ス、道士佐々宇津狩野介祐朗ニ命シ、縄張ヲ為サシム、是レ佐土原兵道家ノ源基ナリ、祐朗元ト伊東家ノ人ナリ、出家シテ真言宗ニ歸シ、久珀ト号ス、薩摩国伊集院ニ居ル後、鹿児島ニ来リ、河田駿河守義朗カ家ニ止ル上、命シテ道家ノ書ヲ写サシム、祐朗陰ニ秘密ヲ抄略シ真言ノ秘密ニ交ヘ私ニ己ノ流ヲ立ツ、義朗恕ル、国ノ逐フ所ト為リ、去テ佐土原ニ在リ、此時忠興公専ラ父君以久公ノ遺意ヲ含ミ城ヲ山下ニ移サンコトヲ謂モ其任スル者ヲ問フ、庶々久珀ヲ挙ク、於是公久珀ヲ召シ縄張ヲ命ス、久珀還俗シテ名ヲ佐々宇津狩野介ト改ム、姓藤原、実名祐朗ナリ、兵道家此ニ始ル、軍配役者タリ、築城・陣営・日取・時取等皆ナ其任ナリ」

佐々宇津狩野介祐朗は『旧事集書』の宇津精之助と同一人物であろう。祐朗は本来的には伊東家の家臣であったが、出家して真言僧となったという。その後、河田義朗の門人となるが、真言の神秘を交え河田とは分派活動をしたため追い出され佐土原に落ち着き、庶々の推挙により忠興に縄張を命じられた。そして佐土原の兵道家として築城・陣営・日取・時取等を握るようになったという。忠興に召し抱えられる経緯など疑問もあるが、このような話が残るほど軍配者といわれる人々は築城に関与していたことがわかる。これについては最近小和田哲男氏も著作を出され(『呪術と占星の戦国史』新潮選書、1998)、また筆者も本会報6号で触れたことがあるが、これも近世初期の事例としてその一つに加えられることになる。

しかし、彼らはその後の歴史の中でどのような命運をたどるのだろうか。戦いという場がなくなり、城を築くこともない。彼らは近世期をどのように生き抜いたのだろうか。城郭ばかりではなく町場の建設や寺社建築などを含めて、その活動を追っていく必要があるように思われる。

城郭紹介

臺灣の城郭消息

台湾にも17世紀初頭から19世紀に築かれた「城郭」がいくつか存在する。植民地政策を進めたオランダ人やスペイン人、その後の鄭成功政権、清朝に関わるものが知られている。1624年、オランダ人が築いた台湾南西の台南市の安平古堡(ゼーランディア城)、石嵌楼(プロヴィンシア城)、1629年、スペイン人が築いた台北市の紅毛城(サント・ドミンゴ城)が著名である。

安平古堡が、ジャワから運んだ赤い煉瓦や砂糖水と餅米の汁で石灰をつき固め、城壁を築いたように、このような城郭は、基本的には煉瓦づくりである。そのような中に、琉球的な石垣の壁を持つものがある。台湾第二の都市高雄市の北、左営駅の近くにある左営旧城遺址がそれである。観光名所として名高い蓮池潭の南にあり、1722(康熙61)年に築かれたものだ。山を取り込み、周囲約3.7km、高さ約3.6mの壁を巡らし、4つの門を設けている。城壁の造築方法は、外側に石灰岩を野石乱積状に積み上げ、内部に土を充填し、最上部を煉瓦で整える手法がとられている。壁の石は、間を石灰状のもので塗り固められている。城門は石灰岩を切り出し、亀甲積・整層積を行い、アーチ部分には硬い花崗岩を使用している。石灰岩を用いて積み上げる手法は、琉球の中世城郭に極めて類似している。時代は異なるものの、注視する必要がある。

(重久 淳一)



左営旧城遺址の城門

高千穂町の中世城郭（前編）

緒 方 俊 輔

宮崎県西臼杵郡高千穂町は、宮崎県の西北端、熊本県・大分県とも接する九州山地の祖母・傾山系の南に位置している。延岡の高橋元種によって滅ぼされるまで、中世は三田井氏が支配していた。現在の西臼杵郡の高千穂町・日之影町・五ヶ瀬町に東臼杵郡の諸塚村を加えた範囲の高千穂郷には「高千穂48壘」と呼ばれる中世山城が存在していたと伝えられる。

平成5年（1993）より宮崎県教育委員会文化課によって宮崎県中近世城館跡緊急分布調査が行われ、平成10年（1998）には「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ・分布地図編」が刊行された。その中では以下の30カ所がリストアップされている。

(1) 崩野城（くえのじょう）

高千穂48壘の1つとして数えられている。河内から五ヶ所へ行く途中の崩野峠の上付近にあると推定されている。

(2) 五ヶ村（ごかむら）

高千穂48壘の1つの「岩戸城」として数えられている。五ヶ村集落を見下ろす所に「城山（じょんやま）」という地名が伝わっている。単郭の曲輪があるらしい。

(3) 永の内（ながのうち）

高千穂48壘の1つの「岩戸城」として数えられている。永の内集落よりも高い所にあると推定されるが、明確な遺構は現在までの踏査では確認できていない。周辺の地名には「布城」「陣」「馬場」「引地」「いばのもと（射場のもと）」「かこい」などが残っている。

(4) 岩戸出城（いわとでじろ）

高千穂48壘の1つの「岩戸出城」として数えられている。「笹の戸」の岩戸小学校のある付近の高台ではないかと推定されている。

明確な遺構は現在までの踏査では確認できていない。

(5) 左右殿城（そうどのじょう）

高千穂48壘の1つの「左右殿城」として数えられている。「城山」の地名が「高千穂町字図」にも見られる。現在はテレビ塔が建っている。頂上部分に平坦地がある。

(6) 詰の尾羽根陣（つめのおばねじん）

高橋元種が亀山城を鉄砲隊で攻撃したと伝えられている場所。

(7) 玄武城（げんぶじょう）

天正年間大友氏のため落城。城主は吉村惣右衛門。墓は上西にある。高千穂48壘の1つの「玄武城」として数えられている。第1の頂上部分には銘文を彫刻した岩があり、「城屋敷」の地名が残る曲輪がある。第2の頂上部分には「中ノ岳」と呼ばれている。草が茂り踏査できていないので詳細不明。第3の頂上部分は「城ノ岳（じょうんたけ）」と呼ばれる平坦な曲輪がある。これには「L字形の土塁」が北と西からの敵を防御する形で作られており、田原方面から攻められた場合、東側の麓の上野の「陣内」側へ逃げたものと推測できる。尾根筋上にも土塁様に土盛りがされ、明治12卯年3月午日、小西定弥氏奉納の石祠の上の標高600m付近にも曲輪がある。城内に「道休屋敷」と呼ばれる堂跡がある。

(8) 柚木野城（ゆのきのじょう）

高千穂48壘の1つの「柚木野城」として数えられている。宮崎県指定「上野10号古墳」（円墳）として指定されているが、頂上部分に2段にわたる長方形の曲輪を築いている。現在は「火伏地藏」が祭られており、地元の方によって毎月地藏さんの日にお祭りをしていそうである。なお、地元の方の話では、「女人禁制」と伝えられている。

(9) 太鼓番（たいこばん）

亀頭山城とネットする要砦の1つとされ、「太鼓番」の地名が「高千穂町字図」にも見られる。

(10) 亀頭山城（きとうさんじょう）

高千穂48塁の1つで、周辺に18の要砦をもつと伝えられている。奥鶴集落から南東方向にのびる尾根を3つの堀で区切って城郭を構成している。三日月形を呈する主郭部分とその北東側にある1段低い平坦地が主たる曲輪で、端部には櫓台と称すべき突出部がある。城主は甲斐将監惟房。地元郷土史研究家の富高則夫氏の熱意溢れる御努力によって買い上げられ、頂上の土塁部分は地籍調査の後、高千穂町へ寄贈のはこびとなっている。高千穂町内では、全体像がわかりやすく、見学しやすい城である。

(11) 古城（ふるしろ）

高千穂48塁の1つの「古城」として数えられ、亀頭山城とネットする要砦の1つでもある。「下の城」の出城とも考えられている。

(12) 下の城（しものじょう）

高千穂48塁の1つの「下の城」として数えられ、亀頭山城とネットする要砦の1つでもある。出城に「古城」がある。亀の頭状に貼りだす平坦な台地を土塁で区切っている。城主は甲斐長門守誠昌。

(13) 馬見原城（まみはらじょう）

高千穂48塁の1つの「馬見原城」として数えられ、亀頭山城とネットする要砦の1つでもある。現在、屋号が「マンバル」の興侶正氏宅裏山となっており、遺構は不明である。

(14) 高城（たかじょう）

高千穂48塁の1つの「高城」として数えられ、亀頭山城とネットする要砦の1つでもある。頂上部分の祠がある場所に曲輪があったものと思われる。現在、地元住民有志によって遠足に登山可能なように道路が造成されている。展望良好、麓には、後の江戸時代には

交通の要衝の「夕塩番所」があった。

(15) 伊東氏小崎屋敷（いとうしこさきやしき）

伊東氏の豊後落ちの際、立ち寄ったとされる小崎将監の屋敷。

(16) 花見山淡路城（はなみやまあわじじょう）

高千穂48塁の1つの「花見山淡路城」。大字向山字中山の中山城を本城とする三田井氏の大字三田井での出城。淡路城の出城として古賀城がある。現在の高千穂高校の裏山を中心としているが、「城山通り」「城ノ平」等の地名から考えると、広くは高千穂警察署や武道館周辺までの高台を範囲としていたものと推定される。高千穂神社裏には「市の祝子（いちのほり）」の地名があるが、「一ノ堀」と通じるかは不明である。北郷泰道氏による縄張り調査によって、「頂上部分に方形の曲輪や虎口がある。」ことがわかった。県文化課によって平成6年に高千穂バイパス建設や高千穂高校第2グラウンド建設に先立って麓部分の発掘調査が行われたが、明確に中世とわかる遺構は出土しなかった。

(17) 古賀城（こがじょう）

高千穂48塁の1つ「古賀城」。花見山淡路城の出城。現在の町立病院付近にあたる。「高千穂町字図」では字名は寺迫で古賀ではないが、戸高又一氏宅の屋号に「神家」や「木家」と書く「こが」が残っている。戸高又一氏によると「かつては神という字を使っていたが、おそれおおいということで木にした」とのことである。県指定高千穂5号古墳（円墳）が範囲内にある。

(18) 亀山城（かめやまじょう）大野原城（おおのばるじょう）

高千穂48塁の1つ「亀山城」。別名、「大野原城」。北～東～南の3方に岩戸川の断崖が巡り、西側のみ三田井から岩戸に通じる街道、（現在の県道7号線（緒方・高千穂線）がある台地とつながっている。西側を3つの堀と2つの土塁で区切って城郭を構成してい

る。遺構の現存状況も良好で「櫓台」らしい高台をはじめ「枳形虎口（ますがたこぐち）」や曲輪も明確に確認できる。城主は富高弥十郎長義。家老は藤田左京。

(19) 車迫陣内（くるまさこじんない）

縄文時代後期～晩期の標識遺跡「陣内遺跡」がある。西南戦争の従軍日記にも「陣内遺跡」のことが書かれている。この近くに三田井でも最大の酒屋があったため、西郷隆盛も滞在したと考えられる。「陣内」という地名がいつ頃からついたのかは不明。「花見山淡路城がこのあたりまで広がっていたものか？」あるいは、若山浩章氏の説のように「陣や囲は領地の最前線に意味があるので？」などの仮説が立てられるが、将来の発掘調査等にかかる期待は大きい。西川功氏は、梅木山長福寺遺跡の五輪塔群などと絡めて、戦国時代以前の三田井氏の居館が梅木から陣内にかけてあったものと考えられている。

（以下、次号へ）

【新入会員】

（12月15日現在）

緒方 俊輔 迫田 行男 向原 慶男

事務局便り

募 集 !

◎機関誌『南九州城郭研究』第2号の原稿募集

1. 論 文 400字×50枚程度（図版・註を含む）
2. 研究ノート 400字×20枚程度（図版・註を含む）
3. 史料紹介 400字×5～20枚、短くても可

お 知 ら せ

- ◆第11回の見学会・例会は3月中旬、宮崎県で開催の予定。
- ◆第7回例会資料集「加藤清正と近世南九州の城」（65頁）、会報「南九州の城郭」第1～5号（合冊）を扱っています。いずれも1,000円です。事務局まで。
- ◆川元茂信会員が南九州城郭談話会のホームページを開設！

URL <http://www.satsuma.ne.jp/myhome/kawamoto/danwa.html>

第10回見学会・例会案内

日 時 平成11年1月10日（日）
10:00～15:00

集合場所 志布志町文化会館
（鹿児島県志布志町）

交通案内 JR日南線志布志駅
徒歩15分

会 順 (1) 見学会
10:00 集 合
10:10 志布志城跡見学
12:00 昼 食
（文化会館）
※ 希望者は弁当を受付けます。
(2) 例 会
13:00 研究発表・質疑応答
・志布志城の構造
・各地の城館調査報告
15:00 解散

編 集 後 記

- ◆今号の発行が、見学会・例会の開催とともに大変遅れましたことを、幹事一同、お詫び申し上げます。
- ◆早くから原稿を頂いた方々には、ご迷惑をお掛けし、さらに、分割で次号にも掲載することになったことを重ねてお詫びいたします。
- ◆機関誌『南九州城郭研究』創刊号の原稿がそろったようです。まもなく皆様方の手元にお届け出来るかと思います。
- ◆次号の会報発行は、3月上旬の予定です。
（Shige）

南九州の城郭 第9号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州城郭談話会
（振替口座 02040-6-37850）
発行者 三 木 靖
印刷所 (株) ト ラ イ 社
入会金500円 年会費1,000円